論文審査の結果の要旨

氏名：二　宮　智　子
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：パーキンソン病患者における姿勢異常と前頭葉機能との関連
審査委員：（主 査）　教授　内　山　　真
　　（副 査）　教授　山　本　隆　充　　教授　阿　部　雅　紀
　　教授　徳　橋　泰　明

パーキンソン病は、安静時振戦、無動、筋強剛、姿勢反射障害を 4 大徴候とし、黒質ドパミン神経細胞の変性を主病変とする錐体外路系の機能障害をもたらす神経変性疾患である。本疾患では、特徴的な α-シヌクエインの封入体であるレビー小体や関連した病理学的変化が、黒質だけでなく中枢神経系に広く存在し、さらに末梢における自律神経系の神経細胞においてもみいだされることが明らかになってきた。このため、4 大徴候とされる運動症状だけでなく、遂行機能障害、認知機能障害、嗅覚障害、睡眠覚醒障害、自律神経障害など多彩な非運動症状に注目が集まっている。こうした多彩な臨床症状の出現は、背景にある病理変化の進展を表現していると考えられ、症候論的な検討が行われている。なかでも遂行機能障害は、本疾患における重要な症状のひとつであり、近年姿勢反射障害や歩行障害、すくみ足との関連が報告され注目されている。本論文では、パーキンソン病患者の遂行機能障害について Behavioral Assessment of Dysexecutive Syndrome (BADS)を用いて評価した。これと姿勢異常の関連について詳細に検討し、遂行機能障害と姿勢異常が関連していることを見出した。さらに、遂行機能障害のある群では、姿勢異常の程度がより高度であり、姿勢異常が高度な群で BADS の年齢補正標準化得点が低かった。これからパーキンソン病患者の姿勢異常は遂行機能障害と関連していることが明らかになり、その背景に遂行機能を担う前頭葉機能障害が関連する可能性が示唆された。

本論文は、目的の設定、方法論ともに適確かつ緻密に構成されており、方法論的によく練られた研究であり、パーキンソン病における遂行機能障害および病態理解に有用なエビデンスを提供するものと考えられる。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以　　上

平成 29 年　2 月 22 日